

私の一冊

一般教育等 鶴橋俊宏 先生

ロバート・A. ホール Jr. 著 『記述言語学入門』（三省堂）

10代の頃、この年代の多くの少年たちがそうであるように、私は自分を取り巻く矛盾だらけの社会に対し怒りを持ち、その醜悪な社会からの抑圧から自由になりたいという強い欲求がわいてきていた。私の場合、その抑圧とは、偏狭な価値観、多様性への不寛容、さらに言えば、差別や偏見のような、心を抑圧するものであり、自由とはそこから精神を解放することであった。そして、それは「真実」を知ることによってのみ可能になり、人生の善なるもの、美なるもの、真なるものに従って手に入るのではないかというようなことを考えていた。

こう考えたのは、研究者でもあった、高校時代の国語のある先生の影響が大きかったと思う。学問をしている人はものの見方が公平だと感じたのである。

学問をし、真実を追究することが曇り無く物事の価値を見る目を養う一つの方法だと感じ、論語の一節のように、自分も同じように真実を求める道を歩もうと心を決めた。

ところが、事はそんなに単純ではなかった。回り道をしてなんとか大学に入ったが、大学とは簡単に何かを与えてくれるような所ではなかった。第一、大学とは業績第一主義の競争社会であり、そんな悠長なことを言っていられない世界であった。また、図書館では見たことも聞いたことも無いような本にさえ誰かが読んだ形跡があり愕然とした。このような大海にあっては、身をゆだねるだけでは自分はどこに流されていってしまうか分からない。そんな不安と焦燥が、「青い」情熱を忘れさせていった。

そんなある日、高円寺の古書店でたまたまこの本を手にした。

記述言語学とは、一言で言うと、ある言語のある一時期の姿を、観察・分析を通して、その体系を描き出そうという言語学の一分野である。『記述言語学入門』などというと厳めしい専門書のような感じがするが、原題は Leave Your Language Alone! と言い、一般向けの啓蒙書であり、一貫して言語に対する自由の精神を説いている。

私たちは、私たちの使う言語を、あるがままに見ればよいのであって、それについて「劣等感」をいだいたり、誰かがそれを「正しい」とか「正しくない」とか言っても、まに受ける必要はないのである。(P.36)

作者は、ことばや、ことばづかいに価値判断を下したりすることの無意味を繰り返し説き、その時々口にされていることばがその場や時代において正しいのであり、絶対的なものはない

と主張している。その背景には、当時のアメリカ社会における社会的差別が背景となっているが、作者の述べているような、ことばに対する謬見は今日の日本社会でも存在するのではなからうか。

この主張の裏付けとして、言語の構造、形態の論など記述言語学の方法論、ことばの意味に関する諸問題などを述べる。もちろん、それは大学の講義で聞いた内容がほとんどであった。しかし、科学的な方法論と人間精神との関係をこれほど明確に聞く機会にはなかった。

よいものと悪いものをえり分けるには、不自然な、皮相的で無意味な基準にまどわされることなく、自分の理性を働かせて、事の真相に迫り、相手の真の価値はどこにあるかをさぐり出そうと努めるのでなければ、その目的は達しられない。(P.202)

忘れかけていた情熱がよみがえってきたことが、当時の自分の閉塞現状を一挙に打開させてくれたなどということはないが、この 300 ページにも満たない小さな本は、旧友に再会したような懐かしさと喜び、そして慰安とを与えてくれた。

最後の章は「記述言語学の応用」で結ばれている。ここでいう応用とは、何か具体的な事柄に直接役に立つというような意味だけではない。我々が様々な問題、未知の難題に出会った時に、どのように立ち向かうかということを知って教えることである。なぜ言語学がそれを可能にするかということ、作者の言を要するに、人間の思考は言語によっているので、言語の本質が分からないと思考の本質までも分からなくなってしまうからである。言語とは、単なるコミュニケーションの道具ではなく、人間の経験を組織化するものであり、さらにその結果を記号として表現するものである。言語学は、このような知見を拓くものであり続ける以上、人間の思考と密接不離なのである。

事が人間の精神という目に見えないものであるから、具体的に、万人に等しく、効用が実感できるものではないだろうと、私は思う。しかし、作者は、それほど人間に密接した学問であるのに、言語学者は象牙の塔にこもったままで一般社会にその成果を還元していないと批判している。これは現代も同じ事が言えるのではないか。何の間違いか、言語の学に従事する者の末席を汚す身となった私にとっても一つの大きな課題である。

本書は 50 年近く前に出版された。いくつか今日の学説と異なる点もあるし、学説の分かれる点もある。言語に限らず、何事でも放任しておけばいい方向に向かうというような楽観主義も、今日ではそのまま受け入れられないかもしれない。また、インターネット時代を迎え、個別言語(特に英語)の位置も変わってきた。しかし、本書で述べられている言語学の本質と精神とは今後も変わることはないだろう。

本書は次の聖句で閉じられている。多くの研究者にとってそうであるように、このヨハネ福音書の一節は私にとっても研究教育活動の原理である。

「あなたは真理を知るであろう。そして、真理はあなたに自由を与えるであろう」

(Ye shall know the truth; and the truth shall make you free.)

